

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）**  
**2007年度研究【経過・成果】報告書**

<b>研究課題</b>	日本が直面するリスクの政治経済		
<b>研究代表者</b>	所属・職名	氏名	
	経済学部・教授	アンドリュー・デウイット 印	
<b>研究組織</b>	所属大学名等・職名	氏名	
	立教大学・経済学部・教授	池上岳彦	
	慶応義塾大学・経済学部・教授	金子勝	
	東京大学・経済学部・教授	神野直彦	
	シェフィールド大学・東アジア研究所・講師	武田宏子	
	シェフィールド大学・東アジア研究所・教授	グレン・フック	
	東京大学・社会科学研究所・助教	山崎由希子	
<b>研究期間</b>	2007 年度	～	2008 年度
<b>研究経費</b>	2007 年度		総計
	2234.176 千円		2234.176 千円

**研究の概要** (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

このプロジェクトの課題は経済学、社会学、政治学の立場から主要アクター（政府、市場、社会）による日本社会におけるリスクの調整や、リスクへの対処方法を政治経済学的に調査・分析することである。本研究で分析される「リスク」は物理的な危険の発生可能性から日本国民全体に対する財政的、経済的な損害まで含まれるが、分析対象となるのはそのようなリスクの日本国内におけるコストと便益に限定される。具体的には、エネルギー及び気候変動、財政破綻、金融、食品、国境などのリスクが分析される。これらのリスクはまさに現在の日本社会が直面しているリスクであるが、国内の主要アクターがこれらのリスクの便益とコストをいかに配分・調整しているかについての研究はほとんどなされておらず、本研究の学術的意義が認められる。また、本研究から得られる知見は中央・地方政府の双方における改革論議に有益なものになると考えられる。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ リスク ] [ 国家—市場—社会 ] [ 政治経済学 ]

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究の経過】**

本研究の課題は、「国家－市場－社会」マトリックスに焦点を当てることによって、日本社会におけるリスクの調整過程を明らかにすることである。「調整」というのはこの場合、国家、市場、社会が互いに関連する 4 つの段階において果たす役割を意味する。そして各段階をそれぞれケース・スタディとし、分析を進めた。

## リスクの処理・調整の 4 段階

## 1) リスクの「解釈」

第一段階は、リスクの「解釈」である。つまり、各媒介領域（国家、市場、社会）によって、多様なリスクが顕在化したり、あるいは隠蔽され、無視される過程を意味する。このようなリスクの「解釈」は国家、市場、社会の媒介領域のみならず、日本国外のエージェントをも含む、様々なアクターがせめぎ合うプロセスなのである。

## 2) リスクの「境界設定」

第二段階は、リスクの「境界設定」である。これもまた、様々なアクターが競合するプロセスである。そこでは、各媒介領域が、多様なリスクのコストと便益の配分を特定の方向に誘導するために、リスクの発生源と結果についての責任に関する境界を設定・再設定しようとする。国家、市場、社会が境界設定に対して影響力の行使を試みることにより、「境界設定」過程もまた、相互作用によって生み出される。

## 3) リスクの「規準設定」

第三段階は、リスクの「規準設定」である。この段階においては、リスクの国内的な規準が確立され、国民がどの程度のリスクに対してなら曝されることが許容されるのか、そのレベルが決定される。この段階もまた多様なアクターがせめぎ合うプロセスである。

## 4) リスク管理

第四段階は、リスクの「管理」である。この段階においては、リスクの統制（すなわち、リスクのコストと便益の管理、調整、配分）などが含まれる。リスクの管理は、多様なリスクの解釈の同意、境界と規制の設定が行われた後に続くものである。リスク管理はそのため、国家、市場、社会の媒介領域によるリスクの解釈から始まるプロセスの最終段階といえる。

本研究ではリスクの調整過程を以上の 4 段階に分け、日本国内における国家、市場、社会の域内でリスクへの対応プロセスを明らかにした。

**【各研究メンバーの取り組み】**

デウイットは化石燃料の埋蔵量をほとんどもたず、海岸に都市が特に集中している日本が直面するエネルギー及び気候変動のリスクについて研究した。先進国の間でもっとも深刻なエネルギー問題に直面しながら、日本政府のエネルギー（及び気候変動）危機に対する反応は鈍い。この、一見矛盾する現状がなぜあるのかを研究した。日本においてこうしたリスクの調整・処理はほとんど市場に任せられており、その理由も調査した。

**研究【経過・成果】の概要 つづき**

金子は金融制度規制緩和のもたらすリスクについて調査した。1996年のビッグバン以降、どのようなリスクが発生し、誰がその恩恵を被り、誰がそのコストを負っているのか、その過程はどうなっているのか、などについて調査した。

神野は格差社会について調査した。現在、格差社会論がさまざまに論じられ、情報が氾濫しているが、この問題をどのように捉え、考えたらよいのか。税制は格差を助長していないか。このような問いを念頭に、現在の日本における貧困、ホームレス問題の現状を調査した。特に国家がリスクの軽減・緩和への介入を減らし、市場にその調整・対処を任せつつあるなか、日本の貧困の原因は何か、社会（市場）によるリスク軽減の勝者と敗者は誰なのか、現在の社会は新しいリスク軽減のありようのマイナス面をカバーするため、適切に組織され、資金を受けているか（NPOなど）、などについても調査した。

フックは国家によってリスクがどのように配分されているのか検討し、更に、そうしたリスクの配分に対して市民がどのように対応しているのか考察した。事例として取り上げられたのは、沖縄に駐留する在日米軍基地である。現在、日本の国土の0.6パーセントを占めるに過ぎない沖縄には、在日米軍の75パーセントが集中している。国家の政策形成に関わるエリートたちは、沖縄に存在する在日米軍基地を、国外からのリスクから国家を守るための手段と見なす傾向にあるが、本研究においては沖縄に住む多くの住人たちが在日米軍の基地自体を「リスク」と見なしていることに着目した。

武田はさまざまなリスクの中でも特に日常生活に関係深いリスク、例えばBSE騒動に代表される食べ物に関するリスクや家計に関する「リスク」などを採り上げ、人々がそうしたリスクを処理するやり方が社会の「安定化」に寄与しているのか、していないのか、寄与しているとすればどのように寄与しているのかという問題を考察した。

山崎は日本の財政（特に中央政府予算）の赤字（国債発行）のリスクについて研究した。過去の政府支出の変化や国債発行額の増加傾向をたどり、それぞれの重要な転換点においてどのような政策決定過程が背景にあったかを調査した。

デウィット、フック、山崎は政治学的視点から本プロジェクトに取り組み、金子、神野は経済学的視点から、武田は社会学的視点から本プロジェクトの調査を行った。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、刊号、発行年、ページ)

アンドリュー・デウィット「エネルギーと環境の危機—租税国家を経済的パラサイト扱いする政治を超えて—」『立教経済学研究』第61巻第2号、49～75頁、2007年。

DeWit, Andrew “Mediating Externalities: Energy and Environmental Risks in Japan.” 『立教経済学研究』Vol. 61, No. 3, pp. 1-28, 2008.

DeWit, Andrew and Tani Tatsuhiko “The Local Dimension of Energy and Environmental Policy in Japan.” *Japanstudien* Vol. 20 (近刊)

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

金子勝・アンドリュー・デウィット『環境・エネルギー革命』(アスペクト、2007年)

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

Mediating Risk in East Asia (シェフィールド大学、2007年7月)

The Political Economy of Risk in Japanese Society (立教大学、2007年11月10・11日)

日本社会におけるリスクの政治経済 (立教大学・2007年11月11日)

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

2007年11月10・11日に行われたワークショップ(“The Political Economy of Risk in Japanese Society”)の報告書をすでに提出済みである。